



7月号

ひだまり

今月のエッセー

音かことばか



おはよう(お早う)、こんにちは(今日は)、こんばんは(今晚は)。

挨拶はまるで脳を介していないかのように口からするりと飛び出し、「言う」というよりも「流れ出る」と言った様子です。あまりにありふれていて、ことばと言うより、むしろただの「音」であるかの様です。

けれども、こうして字に、しかも漢字に書き表してみるとどうでしょう。ことばの重みが少し増したように感じないでしょうか。音が漢字となると、そこに意味が見えるようになります。

特に「今日は…」・「今晚は…」なんか

編集後記



私事ではありますが、二十七歳を迎え、何でも食べられると思っていた私に先日嫌いな食べ物が出来ました。

友人と食事に行った際、彼が「これがたまらないんだ。」と注文したのが生牡蠣。これまで食べたことのない私はその生牡蠣を分けてもらいました。見た目もさることながら、口に入れた瞬間のあの臭い…。私は久しぶりに鼻をつまんで飲み込みました。

しかし、不思議と嫌な気持ちはしませんでした。「私にも嫌いなものがあった。」その事実が、代わり映えしないと思っていた私の嗜好に、生臭くも新鮮な「新しい自分」を運んでくれたからなのでしょう。◆畔柳公潤

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

は、本当はその後にもことばが続いているのに、敢えて口を噤んで出し惜しみされているようで、じれったい気持ちにさせられます。これを辞書で引いてみると、「今日は…」・「今晚は…」という挨拶語の下略(あとの方の文章・語句を略すること)とありました。

思った通り、「今日は」・「今晚は」の後にも、本来であれば話が続くのです。ただ、続けてもいいのだけれど、いつもそうつらつらと話してはいられない。そこで文頭の「こんにちは」・「こんばんは」だけが儀礼的に「挨拶」として残されたのでした。

あまりにありふれてしまったことばは本来の意味等、その生い立ち忘れられ、安易に、まるで「音」のように使われる傾向にあります。私たちが普段使っている中にもそんなことば、見当たらないでしょうか。

ことばにはこころあるものとそうでないものがあります。生い立ちとその主張に耳を傾け、出来る限り前者を發したいものです。◆田代浩潤

法のお話



二年度
國生徹雄くにきてつゆう

『私の修行観』

みなさんは修行と聞いてどんなことをイメージするでしょうか？おそらく、坐禅をすることや滝に打たれることを想像されるのではないのでしょうか。

しかし、それだけが修行ではありません。日常生活のすべてが心掛け一つで修行になるのです。私がそれを思い知らされたのは、大本山總持寺での修行で、食事をしてきた時のことでした。

修行中の食事は基本的には僧堂(修行僧が坐禅や食事、睡眠をする場所)で、応量器という自分専用の食器を用いるのですが、応量器の扱い方等、食事作法が事細かに決められています。

そのため、そこで応量器を使って食事をする時の私は、実に丁寧なものでした。しかし、問題は僧堂以外の場所で、応量器ではない食器を使って食事をする時です。

食事が終わって、自分が使った食器を片付ける時、「ガシャン」と音がなるほど雑に扱ってしまったことがあります。それを見ていた先輩の和尚さんが言いました。

「何だその扱いは。どうしてそんなに雑に扱えるんだ。この器も自分の応量器と同じなんだぞ。お前は一体何をしに本山に来たんだ？」

それまでの私は、修行とは毎朝早く起きて、坐禅をしたり、お経を読んでお勤めをしたり、掃除をしたりと、とにかく「行うこと」が大切で、「どのように行うか」を考えていませんでした。つまり、一つ一つのことを丁寧にしっかりと行うこと。それこそが修行だったのです。

“切に物を逐うて心を変えること莫れ”

これは曹洞宗の教えを中国から日本に

伝えられた道元禅師の著書『典座教訓』の一節です。この言葉は、物によってそれを扱うときの心持ちを変えてはいけなさと示しています。

応量器は丁寧に扱い、応量器ではない器を雑に扱ってしまったように、愛着があるものや高価なものは丁寧に扱うのに、愛着がないものや安価なものは雑に扱ってしまおうということはよくあることでしょう。たとえどんなものでも同じように丁寧に扱おうと毎日努めていけば、やがて意識しなくても丁寧に扱えるようになっていきます。

それはつまり、丁寧に扱うのが当たり前になるのです。そうすれば、物だけでなく、人との付き合い方も丁寧に変わっていくこととでしょう。

なぜなら、どんなものでも同じように丁寧に扱っていくことで、そこに思いやりの心が養われていき、それがやがて人との付き合いの中にも現れて来るからです。

物に対しても人に対しても、とにかく丁寧に心掛けることが修行であるとするならば、修行とは思いやりの心を育てることでもあるのではないのでしょうか。

いろんな仏様

『大黒天』

だいきくてん



今月ご紹介するのは、現在でも七福神の一人として知られている「大黒天」です。大黒天は、ニコニコしている姿とは裏腹に、元々インドでは悪鬼と戦う勇敢な戦闘神でした。

日本には、密教の伝来と共に伝わり、天台宗では守護神として信仰されていた程です。その後、「大黒」と「大国」の読み方が同じことから、神道の神様である「大国主命(おおくにぬしのみこと)」と合体し、五穀豊穡や商売繁盛の神様として広く一般家庭でも信仰されるようになりました。

また、頭に着けている頭巾は上を見ない「謙虚さ」、二俵の米俵は二俵で満足する「欲張らない心」を表しているとされており、

祥泉院様にも大黒天がお祀りされていますので、是非お参りしてみてください。

田中仁秀たなかじんしゅう



私の〇〇自慢



『D51 形蒸気機関車』 (デゴイチ)

私の地元群馬県ではD51蒸気機関車に乗ることが出来ます。「デゴイチ(デユイチ)」の名称で親しまれていたD51形蒸気機関車が、現在でも臨時列車として活躍中なのです。

かつて全国を走った蒸気機関車は時代の流れとともに徐々に姿を消し、一九七六年には国鉄から、一九八二年には民間鉄道からも姿を消してしまいました。しかし、近年の鉄道ブームや引退を惜しむ多くのファンの声から、主に観光目的として復活を遂げています。D51は、日本で一番多く製造された蒸気機関車です。国内でも数多く保存されていますが、動いている姿を見られるのは群馬県と京都府だけです。

汽笛を高らかに響かせ、黒煙を上げながら走るD51。目の前を通り過ぎる時に聞こえる車輪を回す音からは、電車にはない力強さを感じられます。

中野太秀なかのたいしゅう